

F A X送信（全2枚）
農研生環第2181号
平成16年3月19日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

育苗期のイチゴ炭疽病防除対策（技術情報第13号）について（送付）
このことについて、技術情報を取りまとめましたので、防除指導の参考資料としてご活用
下さい。

育苗期のイチゴ炭疽病防除対策（技術情報第13号）

イチゴ炭疽病は、イチゴの葉や葉柄、ランナー等に発病し、症状が進むと株全体が萎凋枯死します。平成15年度は親株床や育苗床で本病の発生が多くみられ、苗不足などの被害がでました。また、定植後も萎凋枯死する株が平年より多くみられました。16年度産の親株のイチゴ炭疽病菌保菌調査を行ったところ、多くの親株で炭疽病菌を保菌していることがわかりました。今後の気象条件や不適切な管理によっては多発する恐れがありますので、親株床では以下の防除対策を徹底しましょう。

I イチゴ炭疽病菌保菌調査

平成16年1～2月に県内のイチゴ主要産地の親株床と栽培ほ場（現在収穫中のほ場）の炭疽病菌保菌状況を調査しました。

- (1) 方法：発病していない株の下位葉（1株あたり1小葉）を採取し、表面殺菌を行ったあと、28℃で約14日間培養し、顕微鏡により分生子を確認しました。
- (2) 結果および考察

表1 親株床におけるイチゴ炭疽病菌保菌状況

No	採取日	検定株数	萎凋性炭疽		葉枯れ炭疽	
			保菌株数	保菌株率 (%)	保菌株数	保菌株率 (%)
1	H16.1.20	10	0	0	0	0
2	H16.2.19	10	0	0	0	0
3	H16.1.20	10	3	30	0	0
4	H16.2.20	10	4	40	0	0
5	H16.2.20	10	2	20	3	30
6	H16.1.23	10	1	10	4	40
計		60	10	平均 17	7	平均 12

表2 栽培ほ場におけるイチゴ炭疽病菌保菌状況

No	採取日	検定株数	萎凋性炭疽		葉枯れ炭疽	
			保菌株数	保菌株率 (%)	保菌株数	保菌株率 (%)
1	H16. 1. 20	10	1	10	0	0
2	H16. 1. 20	10	1	10	0	0
3	H16. 1. 20	10	1	10	1	10
4	H16. 1. 23	10	0	0	0	0
5	H16. 1. 23	10	0	0	0	0
6	H16. 1. 23	10	2	20	1	10
7	H16. 1. 23	10	0	0	1	10
計		70	5	平均 7	3	平均 4

親株床は6ほ場中4ほ場で炭疽病菌を保菌している株があり、また、現在栽培中のほ場にも保菌株があることがわかりました。今後、気温が高めに推移し降雨が続いたりすると、ほ場内で多発する恐れがあるので、以下の防除対策を徹底する必要があります。

II 防除対策

(1) 雨よけ栽培

炭疽病菌の胞子は風雨によって伝搬するため、親株床や育苗床は必ず雨よけ栽培を原則とし、(2)以下の対策をとる。

(2) 無病親株、無病苗の確保

親株は、これまで炭疽病が発生していないほ場から採るか無病苗を購入する。やむを得ず栽培終了後に栽培ほ場から採苗する場合は、特に注意して採苗する。

(3) ほ場衛生

親株床や育苗床は河川水や雨水が入り込んで冠水しないよう排水に留意する。また、全面マルチなどを行い、降雨や灌水による地面からの泥水の跳ね返りを防止する。

(4) 灌水

灌水は朝、夕の乾燥しにくい時間帯を避けて行う。

(5) 発病株の除去

発病株はすぐにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れ密封し、太陽熱消毒などにより殺菌してから処分する。

(6) 薬剤防除

親株床のランナー発生前から定期的に薬剤防除を行う。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を徹底する。薬剤は同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、薬剤の系統を替えてのローテーション使用を行う。

(7) 高設栽培

高設栽培も炭疽病の発生を抑制するのに効果的である。ただし、炭疽病に感染した株を持ち込まないようにし、雨よけしないと効果は低い。

— お問い合わせ先 —
 熊本県農業研究センター
 生産環境研究所病害虫研究室
 予察指導係（病害虫防除所）
 担当：曾我、前田
 電話：096(248)6490